

ローマ人への手紙第一九回質問

23 しかし、「彼の義とみなされた」と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、

24 また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。

25 主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

(ロマ四章二三―二五節／新改訳2017)

(問一)アブラハムに対する神の扱いは、私たちのために記録されています(23、24節)。17節と24節には、神をどんな方としてしるしてありますか。

(問二)アブラハムが神について信じたことと、私たちが義と認められるために神について信じるべきことを比べましょう
(ローマ4…23-25、創世記15…4-6、ヘブル11…11-12、17-19)。

(問三) イエスの死と復活の目的はなんですか。

(問四) 私たちの罪はどんな意味でイエスの死の原因なのですか。
25節、一ペテロ2章24節、イザヤ53章5、6、8節後半、11節参照。

(グループ聖書研究・聖書を読む会手引) より





復活信仰

(ロマ四章二三―二五節)

今日、正しい生き方をするというようなことは、時代遅れもはなはだしいと考えている人々がたくさんおられますが、はたしてこれは時代遅れのことなのでしょうか。そして、正しい生き方などということは、問題にならないほどつまらぬ事柄なのでしょうか。むしろ、このような考え方が横行する今日は、腐敗、墮落した証拠であるとは言えないでしょうか。

人間から正しいと言った道徳観念を取り去ったら、はたしてそこに本当の人間の姿が残るのでしょうか。はなはだ疑問としなければなりません。そこに残るものは、動物的な本能のおもむくままに生きる者たちの姿しかないでしょう。今日あらゆる分野において混乱があり、また問題だらけであるのは、人間が本来の人間としての生き方を失っているところにあるのではないかと思えます。

ところで、人間が正しく生きると言う場合、何を基準にして正しく生きるといえるのかという問題がありますし、また、はたして正しく生きることができるのかどうかという問題があります。こうした問題をも含めて、聖書は人間が神の前に正しく生きることのできる道を提示しております。

神が最初に人間をお造りになった時、それが人間の本来の姿であり、正しい生き方であったのですが、人間が罪を犯したことによって、その本来の正しい生き方から墮落し、みじめな姿になってしまいました。そのため自分の力や努力によつては、本来の正しい生き方を回復することはできなくなつてしまったのです。そこで神は人間を罪から救い出し、神の御前に正しく生きることができるようになさうとされました。この神の備えてくださった救いの道を、謙遜に受け取ることが、信仰の道なのです。ところが、人間は性こりもなく、繰り返し繰り返し、正しい生き方へのむなしい努力を、自分の力によつて獲得しようと試みてきました。これが律法を行なう道であり、不可能な道にほかなりません。

それでは、信仰の道、つまり正しい生き方をするための信仰とは、どのようなものなのか。神に義と認められるために必要な信仰とは、どのようなものなのか。まず第一に、それは神を信じ、神に栄光を帰する信仰です。それは、パウロがここで次のようにしているところだ。「彼は不信仰に根ざして、神の約束を疑うようなことはせず、かえって信仰において強められ、栄光を神に帰し、神は約束されたことを、また成就することができると確信した。だから、彼は義と認められたのである。しかし『義と認められた』と書かれているのは、ただ彼のためだけではなく、またわたしたちのためでもあって、わたしたちの主イエスを死人の中からよみがえらせたお方を信じるわたしたちも、義と認められるのである。」つまり、神に義と認められる信仰とは、神とその約束のみことばを信じ、いつも神に栄光を帰する信仰にほかなりません。これは、別の言い方をすれば、聖書において示されている神を第一とし、神を喜ばせまつる信仰です。

これは出発点です。神を信じるという場合、ただ一般的に創造主であられる神を信じるわけではありません。とくに主イエス・キリストの復活に関して、神を信じるのです。「わたしたちの主イエスを死人の中からよみがえらせたお方を信じるわたしたちも、義と認められるのである」と言われているとおりです。一般的に創造主であられる神を信じるというのであれば、必ずしもクリスチャンと言うことはできません。正統的なユダヤ教徒も、イスラーム教徒も、またユニテリア

ンや、異端も、そういう神を信じているでしょう。わたしたちが義と認められる信仰、つまり、本当のキリスト教信仰は、主イエス・キリストを死人の中からよみがえらせた神を信じるのです。アブラハムの場合もそうでした。そのことを、パウロはここで論証しています。アブラハムはすでに百歳近くになっており、妻のサラも九十歳近くになっていて、普通、常識で考えれば、子供が生まれる年令をはるかに越えていて、子供が生まれる生命力を、もはや持ち合わせてはおりません。けれども、神は「死人を生かし、無から存在にまで至らせる」ことができるお方であることを信じました。つまり、復活の主であられることを信じたのです。ですから、義と認められたわけです。

このアブラハムの例は、パウロによれば、「ただ彼のためだけではなく、またわたしたちのためでもあ」りました。ですから、「わたしたちの主イエスを死人の中からよみがえらせたお方を信じるわたしたちも、義と認められるので」す。パウロは、義認の信仰というものは、キリストの十字架の贖いにあることを述べました。「彼らは神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖い⁽¹⁾によって、賜物として義とされるのである。」ところで、ここでは、キリストの復活にあることを述べています。実は、キリストの十字架上の死と復活こそ、わたしたちが罪から救われ、神に義と認められるための不可欠の事柄なのです。ですから、パウロは、コリント教会にあてた手紙の中でも、キリストの復活の重要性を述べています。「もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなた

がたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。⁽²⁾このように、キリストの復活の事実は、キリスト教の最も基本的で中心的な事柄です。キリスト復活の信仰は、キリスト復活の事実に基づくものであり、これなしに、わたしたちの救いはありません。実にクリスチャンとは、キリストとともに古い人に死に、キリストとともに新しい人に生きた人にほかならないのです。

ですから、パウロは、次のように結論を下しています。

「主イエスは、わたしたちの違反の罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために、よみがえられたのである。」このように、キリストの死と復活は、密接に結びついています。キリストの死は、わたしたちの罪のための身代わりの贖いを意味しています。⁽³⁾そして、キリストの復活は、御子が十字架で成し遂げられた御業を、父なる神が完全に受け入れられたことの宣言にほかなりません。ここで御子のことを「主イエス」と呼んでいることに注意しなければならぬと思います。「救い主イエス」ではありません。「主イエス」と言えば、言うまでもなく、神としての「主」と、人としての「イエス」であって、神であり人であるお方という意味です。また、神が受肉して、人となられたお方という意味です。創造主であられる神が、こともあるように、被造物である人間になられ、被造物にすぎない人間の罪を引き受け、その罪の刑罰を、十字架上で受けられ、そのことによって、永遠の贖いは成し遂げられました。しかし、その宣言は、人の姿をとられた神の御子が、復活されて、神の権威を回復されることに

よつて、はじめて十分なものとなつたのです。

また、聖書の教えているところに従えば、このように言うこともできます。旧約時代において、大祭司は年に一度、民の罪を贖うために、動物の犠牲の血を持って、至聖所に入りました。その罪の贖いが神に受け入れられたことを民が知るのは、大祭司が生きてまゝそこを出て来る時でした。大祭司は、大祭司の服を着ていましたから、その服のすそには鈴がついていました。ですから、大祭司が生きてまゝ至聖所から出て来ることができたことは、その鈴の音で知ることができたのです。キリストは「もろもろの天を通られた偉大な大祭司」⁽⁴⁾です。わたしたちの罪を贖うために、ご自身の血をささげ、もろもろの天を通り、生きておられることを示されました。そのことによつて、キリストの贖いが父なる神に受け入れられたことを表わしております。

キリストの死と復活、これこそわたしたちの救いの土台です。この永遠の救いの土台は、すでに据えられました。それを信じ受け入れる人は、神の御約束どおり、罪から救つていただくことができます。わたしたちの救いの土台は、決して自分のうちにはありません。ただキリストの成し遂げてください。尊い御業にのみあります。わたしたちは、いよいよイエス・キリストによつて、わたしたちを愛し、救つてくださつた神をあがめずにはいられません。

注(1)ローマ教会への手紙三章二四節。

(2)コリント教会への第一の手紙一五章一七節 新改訳。

(3) 「渡され」(四・二五)と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、パラティドミ (*paratidomi*) ということばが使われています。このことばは、イザヤ書五三章の七十人訳で、同じ意味に二回使われています。「主はわたしたちの罪のために、彼を死に渡された」(六)と、「彼らの罪のために、彼は死に渡された」(一一)です。

(4) ヘブル人への手紙四章一四節。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解(ロイドジョンズ・ロマ書講解要約)より

